ART PAPER Nagoya City Art Museum News
アートペーパー 81
ART PAPER 名古屋市美術館ニュース 2009年夏秋号
Nagoya City Art Museum

特集

姿なきプリンセス(下)

「名前は予感、感情をひきおこすので、その後ろになにか隠れているのです」(アンゼルム・キーファー)

アンゼルム・キーファーの絵画《シベリアの王女》(*Princess of Siberia*)は、名古屋市美術館の常設展に展示され、人気の高い作品です(前号アートペーパーの図版を参照ください)。画面の中央には"Prinzessin von Sibirien"の文字があり、画面の右端にはバレエシューズの実物が吊り下げられています。この汚れたバレエシューズは、靴底に記された"M. Wolkonskaja"(M・ヴォルコンスカヤ)の名前とともに、何かを暗示するような胸騒ぎを呼ぶモチーフとして、観る者の目を惹きつけます。その名の人物はロシアに実在した女性で、名門貴族であったヴォルコンスキー家に嫁いだ公爵夫人(プリンセス)であり、この絵画と同じタイトルをもつ伝記*The Princess of Siberia*には、そのマリア・ヴォルコンスカヤの生涯が綴られていました。クリスティーン・サザーランドのこの伝記によると、1825年1月12日*、セルゲイ・ヴォルコンスキーと、ナポレオン戦争時の英雄ラエフスキー将軍の娘マリアがキエフで挙式しました。お互いの出自から、結婚による二人の生涯の栄光は約束されたようなものでしたが、セルゲイの秘密活動が招いた災厄により、わずか1年足らずで、彼らの人生は苦難に満ちたものへと一変します。シベリア流刑に服する夫と辛苦を共にし、やがてシベリアに文化の華を咲かせたプリンセスの物語はここから始まります。

ニコライ・ベストゥージェフ(Nikolai Bestuzhev)
《マリア・ヴォルコンスカヤの肖像》1837年頃

ジョージ・ダウ(George Dawe)
《セルゲイ・ヴォルコンスキーの肖像》1822年

＊　＊　＊

1825年12月14日、ロシア貴族の若き将校たちが、皇帝の専制政治と農奴制の廃止を唱えサンクトペテルブルクで武装蜂起する事件がおこりました。この事件は後にデカブリスト(12月党員)の乱と呼ばれるようになります。この時、即位したばかりであった皇帝ニコライ1世は、蜂起を1日で鎮圧し、これを機に革命運動の指導者と国内の反乱分子を捕らえるように命じました。マリアの夫、セルゲイ・ヴォルコンスキーはこの蜂起に参加していませんでしたが、ロシア南方の秘密結社に参加しており、急進派の代表格で武装蜂起に先んじて逮捕されていたパヴェル・ペステルと懇意にしていたことから、1826年1月5日に警察に逮捕されてしまいます。マリアが初めての息子となるニコライを出産したのは、その3日前でした。

セルゲイをはじめとする政治犯達は、冬の宮殿の対岸にあるペトロパブロフスク要塞に投獄されました。1826年7月9日、嫌疑のかかった579名に判決が下り、指導者とみられた120名のうち、ペステルら首謀者5名に絞首刑が、残りの罪人にはシベリアへの流刑と期限付きの重労働が宣告されました。ラエフスキー家は義理の息子の不名誉を被らぬよう、ヴォルコンスキー家との縁を絶とうとします。しかし、そのような反対を押し切り、マリアはシベリアへ赴いた夫と運命を共にすることを決意しました。夫が亡くなるまでヨーロッパロシアには戻れないこと、また産まれたばかりの子供を残していくことなどを条件に、マリアは皇帝の許可をとりつけます。マリアはサンクトペテルブルクを発ち、ひとまずモスクワに立ち寄りました。モスクワの義姉の邸宅ではマリアの歓送会が催されました。その場には旧知の仲であった若き詩人プーシキンがおり、彼はその晩マリアの傍らを離れなかったといいます。そして1826年12月29日、馬ぞりに荷物をつみ、2人の従者と共に、マリアはモスクワからシベリアに向けて出発しました。道中は厳しい寒さと飢えと痛みとの戦いでした。一行はウラル山脈を越え、イルクーツクを経由し、バイカル湖の氷上を渡り、約1ヶ月でネルチンスクに到着しました。

セルゲイはネルチンスク郊外の銀山で働いており、マリアはそこで足を鎖で縛られた夫と再会します。監獄での夫への面会は週2回に限られ、看守の立会いのもと、会話はロシア語に制限されました(上流階級はフランス語を公用語としていたため、マリアは子供程度のロシア語しか話せませんでした)。マリアに先んじて、トルベツコイ公爵の妻カチューシャがネルチンスクに到着していましたが、彼女たちの存在は夫たちに限らず、すべての囚人たちに恩恵をもたらしました。囚

アートの旅「過去・現在・未来」

(彫刻家・元名古屋市美術館参与)
石黒 鏘二

風景の中で　その3
主張をやめたモニュメント

摩天楼が林立するアメリカのイリノイ州シカゴは、アレクサンダー・カルダーをはじめパブロ・ピカソ、オルデンバーグ、ハリー・ベルトィアなどの巨大彫刻群の競演で有名である。この様な物量のみならず、常に自らの存在を主張することで環境化を計ろうとするのが、一般的モニュメントの概念であり、ごく普通の姿と言える。

ところがわれわれは、最初からそれらへの関心も興味もなく、むしろそれらを積極的に放棄したとしか思われないモニュメントに出会い戸惑うことがある。ドイツの彫刻家ウルリッヒ・ルックリウムの作品は、その代表的一例であろう。

私がはじめて彼の作品を目にしたのは、1993年スペインのバルセロナのゴビエルノ市民宮殿前であった。フランシァ駅で、プロバンス経由ヴェニスに向かう友人たちを見送った後、地下鉄の駅を探していて偶然にも、その彼の白花崗岩による作品に出会った。

そこには、全く無表情な単なる三角形をした石が、それぞれ二個づつ一対で四個並んでいた。高さ2メートルほどの二つの長方形の石を、それぞれ斜めに二つに割り、四個となった三角形の石を左右対称に行儀よく並べている。

どうしたわけか、その周辺だけ薄暗いせいもあり、一緒にいた連れの友人など、それが彫刻とは気づく風もなく通り過ぎようとした。何を語るでもない無表情な白っぽい大きな石塊は、単なる資材かせいぜい門柱ぐらいにしか見えないのだ。

彼の作品には、ミュンスターやフランクフルトやメンヒェン・グラートバッハなど、ドイツ各地で多く出会うことができる。しかし、そのほとんどは原石そのままの形であり、それが作品であると気づくのはかなり困難である。まだこのバルセロナの場合は、三角形という人工的な形をしていて親切であった。

彼の作品の多くは石材である。彼は原石を与えられると、それを丹念に二つに割っていくところから仕事をはじめる。二つに割られたそれぞれを、さらに二つに割るのである。それが彼の前半の作業である。そして後半は、その割られた石の一つひとつを一欠けらも残さずくっつけ元通りの原石に戻すのである。その内蔵された作業はほとんど分からない。われわれは、この徒労とも言える行為に何を読み取ればいいのだろうか。

時の話題

「ルーヴル美術館展」は見ましたか？

「最近、○○○美術館展が増えてきたな」と思いながら、試しに「ルーヴル美術館展」でウェブ検索してみると、いきなり「2009年、東京で2つの『ルーヴル美術館展』開催」というサイトを見つけました。国立西洋美術館(開館50周年記念)の「ルーヴル美術館展　17世紀ヨーロッパ絵画」と新国立美術館の「ルーヴル美術館展　美の宮殿の子どもたち」です。ルーヴル美術館長のメッセージと各々の展覧会の内容を詳細に解説するサイトへのリンク・ボタンだけの単純なものですが、「いよいよ、ここまで来たか」という感じがしました。

思い返してみると、ここ数年立て続けに日本で「ルーヴル美術館展」が開催されています。インターネットで簡単に調べてみても、「ルーヴル美術館展」という名前の付いた展覧会が毎年のように開かれて、数多くの入場者を集めているのです。サブタイトルだけを列挙してみると、「中世フランスの秘宝」(2004年)、「19世紀フランス絵画」(2005年)、「古代ギリシア芸術・神々の遺産」(2006年)、「フランス宮廷の美」(2008年)などですが、ルーヴル美術館のコレクションがいかに膨大な質量を持っているかということに驚かされます。

それと同時に、このような状況を考察するならば、明らかにルーヴル美術館は経営戦略として日本市場をターゲットに、多様多彩な「ルーヴル美術展」を仕掛けているように思われるのです。まるで日本の映画館を席巻し続けてきたハリウッド映画(最近は落ち目ですが)のように、「ルーヴル美術館展」は日本の美術館(への入場者)を独占することを目論んでいるかのようです。ちょっと大袈裟に言うならば、日本の美術館はルーヴル美術館の一時的な海外展示場のような存在になりさがってしまっているのです。

しかし、振り返ってみると、名古屋市美術館もまた同様に「ルーヴル美術館展」ならぬ「エルミタージュ美術館展」を2005年と2007年に立て続けて開催しています。「華やぐ女たち・エルミタージュ美術館展」と「大エルミタージュ美術館展」ですが、それぞれ5万人余と15万人余の入場者がありました。

このような現状を頭を抱えながら考えるほどに、美術館の根源的な力としてのコレクションの重要性を痛感させられます。(sy)

人たちは自分の家族に手紙を送ったり金品を要求することを禁じられていましたが、マリアやカチューシャがそうする分には、とりあえず誰も咎めることができなかったのです。彼女たちを通して、囚人たちとその親族の交信が可能になりました。

1827年の夏、ネルチンスクの８人の政治犯は、バイカル湖とネルチンスクの間に位置する、インゴダ川流域の町チタに移送されます。そこは農業に適した土地で、新しい監獄の周囲には菜園が設営され、囚人たちは他に労働がなければ夏に土壌の改良を、冬には小麦のミル挽きを行いました。セルゲイは野菜の栽培に才能を発揮し、マリアを通じてヨーロッパロシアから取寄せた種から、メロンやカリフラワーなど、それまでシベリアに存在しなかった作物の収穫に成功しました(その栽培は後にシベリア全土に広がっていきました)。

チタには、シベリアの各所に散っていたデカブリストたちの多くが集められ、また彼らの妻の何人かが、カチューシャやマリアと同様、夫の後を追ってやってきました。彼女たちは監獄にほど近い、チタのメインストリート沿いに家を建てて生活しました。夫との面会は相変わらず週２回に限られていましたが、ただしここでは囚人たちが妻の家へ訪問し、そこで過ごすことができるようになりました。チタにいる間の1828年の春、サンクトペテルブルクから、ヴォルコンスキー宮殿に残してきた息子ニコライが２月に亡くなったという悲しい知らせが届きました。マリアは1829年の冬に新たな命を身ごもりますが、1830年の７月に生まれた娘ソーニュシュカは、先天的な心臓疾患のため僅か２日でこの世を去ってしまいました。

1930年８月、囚人たちはチタからペトロフスキー・ザボッドへと移されます。マリアは1832年３月に息子ミハイルを、その２年後に娘エレナを出産します。ミハイルの誕生は天からの贈り物でした。その頃マリアの頭の中には、密かに夫と別れたほうがよいのではないか、という考えがよぎっていたのです。ミハイルが産まれた時、43歳になっていたセルゲイは寡黙でひどく気難しい男になっていました。マリアはこれまで、夫の気を紛らわせながら、かつての結婚生活を回復しようと努力をし続けてきましたが、１年半前に２日で亡くなった娘の一件以来、二人の間の距離が開き始めたのでした。そして、ペトロフスキー・ザボッドの監獄に収監されたデカブリストの一人で、マリアより７才年上の健康的なイタリア人、アレッサンドロ・ポッジョの存在が、彼女の心を捉えるようになっていました。結局、マリアはセルゲイと離婚することはしませんでした。しかしポッジョとの親密な関係も、世間やセルゲイから半ば認められる形で続きました。

ペトロフスキー・ザボッドにて重労働の刑期は終わりを迎え、デカブリスト達は監獄から順次解放されてシベリア内の小村など各地に移ることになりました。ただし生活はいまだ警察の監視下にありました。1837年３月、ヴォルコンスキー一家は、アンゴラ川流域の村で、イルクーツクから20マイル離れたところにあるウリクへ移住しました。ウリクには、デカブリスト達の中でも優秀な人物が集まっていました。マリアの２人の子供、ミハイルとエレナは、デカブリスト達を家庭教師に、数学や歴史、ギリシャ語などを学び、マリア自身も子供たちに英語を教えました。デカブリスト達は彼らの子供たちのみならず、近隣の人々にも様々な知恵を授け、医療などの恩恵をもたらしました。ミハイルが12歳になると、マリアは彼に公的な教育を受けさせる必要を感じて、中学校のあるイルクーツクへの一家の移住を懇願します。皇帝はマリアと２人の子供の移住を許可しますが、セルゲイには認めませんでした。そのため、夏や休日はウリクの家で過ごすことにして、1844年３月、３人はセルゲイと離れてイルクーツクへと移りました。

マリアは、前年に亡くなった母の遺産の送金によって、イルクーツクで立派な屋敷を購入することができました(この屋敷はデカブリスト博物館として現存しています)。マリアの貴族としての身分は公式には剥奪されたままでしたが、その生活はかつての頃の水準に近づいていました。シベリアには貴族階級や上流階級がいなかったため、歴史的に名の通った(かつての)貴族の到来に、イルクーツクは騒然となりました。東シベリア総督に、デカブリスト達に理解のあるムラヴィエフが就任してから、マリアは孤児院の拡張整備や小学校教育の改善など、街の福祉と教育の事業に従事するようになりました。またあるときは学校で子供たちに歌を教え、聖歌隊を編成し街の人々を喜ばせました。そのうちに、マリアは「我らのプリンセス」として市民に慕われる存在になっていました。一方セルゲイはすっかり農夫としてウリクに落ち着いており、農業に関する知識によって地元農民達からの尊敬を集めていました。1854年６月には、マリアの夢であった、イルクーツクに劇場(兼コンサートホール)を建てる計画が、故郷の兄妹たちの援助により実現しました。それはシベリア地方で最初の劇場でした。

1855年２月、ニコライ１世が死去し、30年にわたる「ロシア闇の時代」が終わりを告げました。後継のアレクサンドルは父より寛容で、９月、マリアに対し１年間のモスクワ滞在を許可しました。マリアがモスクワに戻ってから、約束の１年が経とうとした1856年８月、アレクサンドル２世の戴冠式が行われた当日の午後、遂にデカブリスト達への恩赦が言い渡されました。10月、セルゲイはモスクワへ到着し、長いシベリアでの抑留生活が幕を閉じました。

1863年８月10日、ウクライナのヴォロンキーにてマリアはその生涯を終え、セルゲイは1865年11月28日、同地で回想録を綴りながら息を引き取りました。

＊　＊　＊

前号で紹介したように、マリアと直接交流があった詩人プーシキンは、その著作『オネーギン』の一節でマリアへの思慕を歌い、また『バフチサライの泉』のヒロインにマリアの名を与えました。そして、それらの他にも"M.ヴォルコンスカヤ"の名から想像される物語があります。1856年のデカブリストたちの帰郷は、文豪トルストイが『戦争と平和』を構想するきっかけを与えましたが、その『戦争と平和』のヒロインの一人として、公爵令嬢マリア・ボルコンスカヤが登場します。ただし、このヒロインは、デカブリストの妻マリアが直接のモデルというわけではなく、彼女と同名であったトルストイの母マリア・ヴォルコンスカヤに由来するといわれています。また、詩人ネクラーソフは、叙事詩「公爵夫人ヴォルコンスカヤ」(『デカブリストの妻』)を書き、その中でマリアに次のように詠わせています。

「わたしの席は きらびやかな舞踏会にはなくて／遠い 陰気な荒野の中に―／そこには牢獄の片すみに／つかれはてた囚人が／おそろしいおもいにさいなまれているのです。ただ一人…支える者もなく…おお 急いであの人のところへ！」

キーファーによって描かれた《シベリアの王女》の感傷的な光景は、M・ヴォルコンスカヤの名にまつわるいくつかの物語とリンクすることで、情感をさらに深めていきます。これまでの旅、あるいはこれからの旅にマリアの運命を重ね合わせることによって、絶望や希望、愛情や祈りに似た様々な感情が交錯することでしょう。(nori)

＊ロシアでは1918年までユリウス暦(旧太陽暦)が採用されていたため、本文中の年月日はユリウス暦で表記されています。

展覧会の舞台裏

作品の運搬と展示 3

美術館に限らず、どんな仕事も歴史を積み重ねるうちに次第に内容が複雑に、そして高度になっていくのが常です。そして、その高度で複雑な仕事に充分に応えるためには、その内容を細分化し、分業化と専門化を押し進める必要が生じてきます。例えば運搬や展示に関しても、まだ私が学芸員として活動する以前の30年以上も前の時代には、学芸員がすべて行っていたという話を聞いたことがあります。すなわち、所蔵家のもとを訪れ、作品を点検し、梱包し、自らトラックを運転しながら美術館に運び込み、そして展示室に飾るまでの一切を、展覧会の担当学芸員が行っていたという時代も、美術館の草創期にはあったようです。しかし、今現在、これだけの作業をすべて一人で行っている学芸員というのは、恐らく皆無と言っていいでしょう。「だから今時の学芸員は…」という諸先輩方の嘆きが聞こえてきそうですが、作品の安全や保全に対する要求のレベルが、かつてとは比べものにならないほどに高まっている昨今の状況では、分業化はやむを得ない歴史の流れといえるでしょう。美術品の運搬や展示は、ほとんどの場合、専門の輸送業者の作業員によって行われているのが実体です。

それでは運搬や展示の際、学芸員は何をしているのか？　一つ一つの作業が安全、確実に行われているかどうか監督をする、それが学芸員の仕事になります。とは言っても、作品に振動を与えないように丁寧に扱うとか、作品から一時も目を離さない、などというのは当たり前で、例えば、作品をトラックや飛行機に載せる際の方向という問題があります。クレートと呼ばれる頑丈な木箱に入った作品をトラックの荷台や飛行機の貨物室に載せる場合、それが絵画であれば、必ず画面と進行方向が並行になるように、積載しなければならないという原則があります。なぜかというと、進行方向と画面が垂直の場合、発着の際の急激な加速・減速によって画面がバタバタと振動してしまう可能性があるからです。大きな画面になればなるほど、その振幅は大きくなり、絵の具の剥落や亀裂など深刻なダメージの原因となります。そこで進行方向と並行に積載するという大原則があるわけですが、このような基本的な原則を運送業者の作業員が全員熟知しているかというと、そうとは限りません。特に飛行機の貨物室のように、専有面積によって運送費が大きく左右される場合など、効率優先で詰め込まれてしまう危険性がしばしばあるのです。こういった危険性はもちろん梱包や展示の際にもあるわけで、そのような危険をいかにして最小限に食い止めるかというのが監督する学芸員の責任になるわけです。というわけで、かつての諸先輩方のようにすべての作業を自ら行うというわけではないのですが、逆にすべての作業について最新かつ最善の方法を熟知していなければならないという点で、現在の学芸員はむしろ厳しい状況に置かれているといえます。(F)

感想ノートから

名古屋市美術館 20年のあゆみ展

2009年２月21日(土)～３月29日(日)

開館20周年の年度を締めくくる特別展として開催した「20年のあゆみ展」。この展覧会では所蔵作品に照らし合わせて名古屋市美術館のこれまでの活動を紹介しましたが、教育普及活動の紹介に多くの空間を割り当てました。また、活動の拠点である建物、なかでも展示室の特質に気づいていただける展示構成を行いました。

名古屋市美術館は教育普及活動をいろいろと行っています。「感想ノート」もそのひとつです。展覧会をご覧になったみなさんが自分の思いを書き、それを誰かと共有する。それがそれぞれの美術体験を豊にすることにつながると考えています。私たちもそこから多くを教えられ、つぎの活動につなげています。こうした考えは、ボランティアによるギャラリートークや「ここがおもしろい！」などにも共通し、名古屋市美術館の教育普及活動の基本となっています。

いつもは展覧会について書いていただくために展示室の出口に置かれている感想ノート。「20年のあゆみ展」では「名古屋市美術館へのメッセージ」というコーナーにして、葉書より少し大きなカードに名古屋市美術館への思いを記していただきました。会期の終わりにはコーナーの壁面がカードでいっぱいになるほど、たくさんの心のこもったメッセージをいただきました。

「常設展示室を訪れるごとになつかしい人に出会うような優しい気持ちになる自分があります。良い作品に出会う喜び、そしてそれを人と語り合う楽しさをしみじみ感じます。」

これは、私たちにとってたいへん嬉しいものです。意外だったのは、名古屋市外や県外の遠くからのお客様がメッセージを数多く残されたことです。ご自身が住まう地域や東京などの美術館と比べて、名古屋市美術館の良いことを褒め、励ましてくださっています。こうしたメッセージからも当たり前のものとして馴れ親しんだ名古屋市美術館を見直していただけたことでしょう。

先行してお寄せいただいた「わたしの1点」と「わたしの美術館」。これらを含めてご参加いただいたみなさまにお礼を申します。これからも名古屋市美術館をご支援ください。(み。)

会場のメッセージ・コーナー

展覧会 現在進行形

「放課後のはらっぱ ー橿田伸也とその教え子たち」展

当館の収蔵作家である橿田伸也は、半具象的な風景をモチーフに描き続け、日本を代表する具象絵画の作家として知られています。しかし、近年、日本を代表して活躍する若手作家に、愛知県立芸術大学で学び、橿田から教えを受けた者が多くいるということはあまり知られていないのではないでしょうか。「放課後のはらっぱ展ー橿田伸也とその教え子たち」展は、橿田伸也の作品の初期から最新作までを見せると同時に、彼が愛知県立芸術大学で教鞭をとっていた間に彼のもとで学んだ作家達を紹介する展覧会です。実はこの展覧会、ちょうど今準備の真最中なのですが、橿田と若い作家達の交流を見せるところで、ちょっとユニークな内容になりそうです。というのも、本年３月に東京藝術大学教授を退任し、４月から再びアトリエのある長久手に戻ってきた橿田への「お帰りなさい」という気持ちを込めて、奈良美智、杉戸洋、森北伸が企画に協力し、教え子の作家ならではの様々なアイディアを盛り込んでいるからです。

展覧会では、教え子の作家19人のそれぞれの現在の作風を代表する作品はもちろん紹介するのですが、学生時代の知られざる旧作や、彼らの思い出の品なども展示される予定で、橿田をはじめとする作家たちの作品制作の秘密が垣間見られるものになると思います。また、各作家たちからの恩師橿田への感謝の気持ちを込めて制作された橿田伸也ポートレートは、それぞれの作家の持ち味が出ていて見応えのあるものとなっています。

しかも、愛知県美術館との２会場同時開催で、両会場あわせると作品点数200点以上と規模も大きく、展示インスタレーションにも様々な工夫を凝らす予定です。名古屋市美術館の展示は、橿田伸也作品の色や構成、モチーフに合わせて選ばれた教え子たちの作品を配置する予定です。もしかすると、展示そのものが絵のように感じられるかもしれません。関連イベントも盛りだくさんです。みなさん、ぜひお楽しみにしてください！(hina)

どこがおもしろい?!

今回は三岸節子(1905－1999)の《雷がくる》(1979年)に対する皆さんの感想を紹介します。

「赤のパワーだ！この赤色が好きだ！一日の始まりにパワーをもらうために見つめたい赤だ！ステキな色だ！」(容子さん、？歳)

「やねが、われてるのがおもしろい」(はづきさん、７歳)

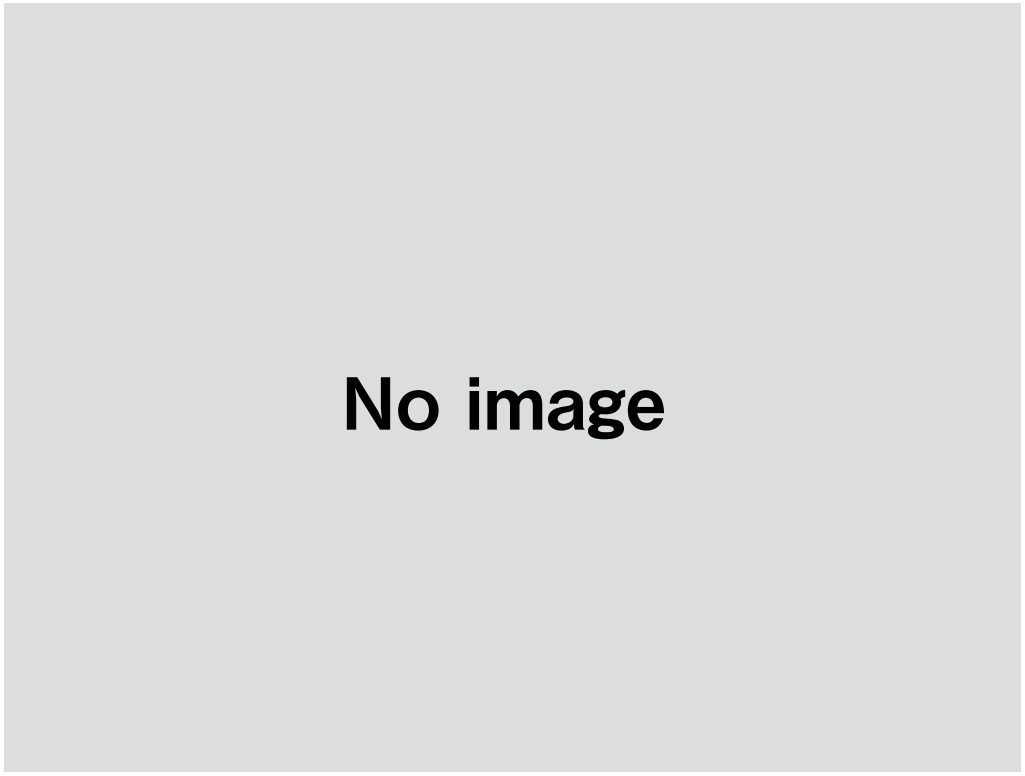
「黒い点々が人々のように見えて、赤の所がレンガで、人々は外の世界にいるけれど、地下の家から上の人々を見守っているように見えます。空の色がおかしいので、雷(あらし)がきて、上の人々がにげているように見えます。」(みなみさん、11歳)

「家が寄り集まっている。全体として内向きの円になっているので、本当に雷をこわがっているように見える。でも、白と赤の色があたたかい、かわいらしい雰囲気がある。家同士が肩を寄せ合ってはげまし合っているようにも思える。」(匿名、27歳)

「赤い大蛇がのたうちまわっている。煙突っぽく見えるものは実はかんおけ。蛇に食べられた人の数。空は今まさに悲しみの雨を降らそうとしている。」(匿名、26歳)

「雷が来るんだからピカッと光っているところを描けばいいのに、あえて台風が来るみたいにする所(がおもしろい)」(史洋さん、13歳)

「こんなアカく染まった場に雷が落ちても、きっとキレイじゃないと思う」(五月さん、18歳)



三岸節子《雷がくる》1979年

「わたしがもし、この《雷がくる》という題材で絵を描いていたら、空が紫色だなんて絶対に思いつかないと思います。なので、とてもすごい！又、下の赤と白とこげ茶色の部分は家々かなーと思いますが、友達は橋だと思ったそうです。色々な見方があって、とてもおもしろいと思います。さいごに、紫と赤を使う事により、この作品をより気味悪くさせ、本当に雷が落ちてきてもおかしくないという感じが出るようにしたのも、とてもいいアイデアで感心しました。」(匿名、11歳)

「稲光が光って音がするまでの一瞬の間の緊張感が感じられます。その一瞬の待ちかまえた感情がドキドキだったりビクビクだったり…。その胸の高鳴りが画面上からヒシヒシと伝わってくるようです。」(匿名、？歳)

「大胆な構図で、目にもあざやかに、また強烈にとびこんでくる赤い屋根と暗雲が乱れてまき上がる空！今にも雷光、雷鳴がひびきわたりそうです。けれど、画面全体が調和のとれた色調で、なぜかあたたかさや優しさがただよい感じられるのは…なぜでしょう?!」(清美さん、49歳)

「大好きな絵です。奥底から紅の血潮が燃えたぎりながらも、あるラインでじっと止まっている。何か一つの刺激で全てが爆発する“トキ”を待っている…。しかしそのうねりや爆発は決していらだちや怒りではなく、新たな生、新生へのエネルギーのような気もします。誰でも心の中に噴火口を持っている、生きている…」(育子さん、59歳)

「“来そう”ではなくて、“来る”のである。“来る”のである以上、屋根の赤は覚悟せねばならない。雷雲が圧してくるのか、ひそかに緊張した屋根が残るのか。互いにもり上がってくる。例えば、大相撲の結びの一番、軍配が返ったトコロか。」(ハタノさん、25歳)

「三岸節子74才の時の作品なわけだ。不安、きれい、とか通り越して74才でこの力強さ。それに比べて私はなんてひ弱なのか。今からでもいろんなことに挑戦しよう。力をもらえた作品でした。」(ユキエさん、60歳)

三岸節子は愛知県尾西市(現・一宮市)出身の洋画家で、1921年に本郷洋画研究所で岡田三郎助に師事した後、女子美術学校へ編入、1924年に首席で卒業し、三岸好太郎と結婚します。翌年には春陽会に初入選し、婦人洋画協会を設立、1934年に夫が急逝した後も、子育てや戦争などの苦難と向き合いながら画家として着実に力をつけ、日本における美術界の女性進出にも重要な役割を果たしました。

《雷がくる》は、作家の渡仏中に制作された作品です。描かれた風景にどんな人々が住んでいるのか、絵から詳しい様子をうかがい知ることはできませんが、もやもやと暗い空と鮮やかな赤い屋根との対比、そこから生まれる緊張感に惹きつけられた方も多いでしょう。また色の強烈さや組み合わせの妙だけでなく、何度も塗り重ねられゴツゴツと盛り上がった様子や、キャンヴァスをつたって流れ落ちた跡など油絵具のもつ表情や筆跡から、私たちはエネルギーを感じるのかもしれません。今回もたくさんの意見をお寄せいただき、ありがとうございました。(3)

美術館Q&A

「絵ってどんなもんから見るのが一番綺麗なんですか？正直、油絵は近くで見るよりも離れて見る方が綺麗に思えるんだけど、というか近いと絵具のかたまりにしか見えない。私は２～３ｍ離れて見るのが好きなんだけど、そうすると今度は人ごみで前が見えなくなる……。」というご質問がありましたので、それについてお答えしたいと思います。

絵にはいろいろな種類があります。油絵もあれば日本画もあり、版画やデッサン、水彩画などもありますね。そして、それぞれの種類の中にも、様々な性質の絵が存在します。ですので、どのあたりから見ると一番綺麗に見えるか、それは、絵の種類や性質によって千差万別といってよいでしょう。ご質問には、「油絵は近くで見るよりも離れて見る方が綺麗に思えるんだけど、……」とありますが、油絵の中でも特にそれが顕著なのは、印象派の絵画です。印象派の絵画は細かいタッチの筆跡が並ぶことによって画面が出来上がっていますが、あまりに近くで見ると、なにが描いてあるのかよくわからないことがあります。しかし、２～３ｍ距離を置いて見ると、物や人の輪郭がくっきりと浮き立って見え、はっきりとその絵を認識することができます。印象派絵画が「綺麗に」見えるのは、やはり、少し距離を置いて鑑賞した場合、ということになるわけです。しかしながら、それだけが印象派絵画の鑑賞方法か？となると、答えは否です。遠くで見る醍醐味もありますが、近くで見る醍醐味も、また、あるのです。もし、今後印象派絵画を鑑賞できる機会がありましたら、遠くで眺めた後に、ぜひ、至近距離まで近寄ってみてください。そこには、生々しい筆跡があります。時に整然と、時に激しく置かれた筆跡は、それを描いた時の画家の息遣いを感じさせ、生きた絵画の迫力を伝えてくれるものです。例として印象派を挙げてみましたが、印象派以外の画家の作品でも、筆触の露なものは沢山あり、やはり同じように遠くで見たイメージと近くで見たイメージが大きく異なったりします。逆に日本画の大半は、絵具の盛り上がりなどがあまりありませんので、遠くで見ても近くで見てもあまり印象が変わらない場合も多くあります。また、小画面の版画などは、近寄って親密な雰囲気で鑑賞するのに適しているといえます。

とはいえ、絵を見るのに、遠くで見るべきか、近くで見るべきか、そこには何のきまりもありません。見たいように自由に見ていただいて構わないのです。遠くから見たり、近くから見たり、動き回っていただいて一向に差し支えありません。そうすることによって、「ああ、この距離から見るこの絵が一番美しいなあ。」という感想を抱かれるかもしれません。その時、その絵とさらに親しくなることができたといえます。

ご質問には、距離を置いて見ると「人ごみで前が見えなくなる……」という風にも記されていましたが、これは、なかなか解決の難しい問題ですね。美術館としては、快適な環境で観ていただければ、と思っているのですが、人気のある展覧会で沢山のお客様にお越しいただくと、どうしても人ごみができてしまいます。できるだけ快適にご鑑賞いただけるようにすることが、美術館のひとつの課題です。(akko)

＊ご質問いただいたR.Yさんには、「躍動する魂のきらめき―日本の表現主義―」展のチケットをお送りいたします。

郷土の作家たち

伊藤良三(いとうりょうぞう／1899－1981)

壁にもたれかかり煙草を吸う男の姿、土手の彼方に現出した飛行船のような巨大な空中回廊、そしてその白く抜かれた壁面に落とされたビルディングの不思議な影。写真家を取り巻く身近な都会風景の断片を寄せ集め、構成した画面は、遠近と奥行きとスケールを混乱させるかのような錯覚を観る者にあたえる。名古屋市に生まれ、高田皆義、津坂淳らが結成した〈中央光画会〉の会員として、1931(昭和６)年には「第六回日本写真美術展」第一部第一科に入選を果たした伊藤良三は、翌1932(昭和７)年10月発行の〈日本光画協会〉『画集』第22輯に、作品《私のゐる風景》を発表している。

ピクトリアリズム(絵画主義的写真表現)の最後の輝きを見せた〈日本光画協会〉ではあるが、この作品が発表された1932年には、すでに時代の表現は大きく変容しつつあった。“カメラ・アイ”を強く意識した「新興写真」は、リアリズムを提唱し、それは例えば、人々に世界が鉄とコンクリートとガラスによって出来上がっていることを示し、そして何よりも写真の対象とは自身の心情を反映させたものなどではなく、絶対的な「他者」に求められた。

〈日本光画協会〉主宰の山本牧彦は、同作品に対して次のような評を寄せている。「怪奇的な風景である。又相当その怪奇味に於て成功してゐると思はれるが此風景をもっと現実的に取り扱って見ても相当面白からうと思はれる。」

写真家自身が画面の中心におかれ、その周囲は影ではなく、白によって“抜かれた”その画面からは、自然や郊外風景に寄せたメルヘンチックな表現ではついぞ表れなかった都市の孤独が強く印象付けられる。そうしたある趣のセンチメンタリズムを評価しながらも、山本の評言には、自身が唱導する表現が、すでに時代や彼らを取り巻く環境にすらそぐわなくなっていることを自ら言及するものともなっている。(J.T.)

伊藤良三《私のゐる風景》1932(昭和７)年
〈日本光画協会〉『画集』第22輯掲載

斎藤吾朗(さいとうごろう／1947－　)

独特の赤を主調とした色使いのいわゆる「赤絵」として有名な斎藤吾朗は、1947年に愛知県西尾市に生まれた。

多摩美術大学油絵科を卒業、同大学大学院修了。しばらくの間、地元の高校で美術講師として教鞭をとった。1972年、生徒の企画で、個展とコンサートを兼ねた「コテンサート」を開催し、その記念撮影のようすを描いた作品《コテンサート後の記念撮影》(1972)が第40回独立展で初入選を果たす。この作品は、早くも「赤絵」であった。郷里でいくつもの個展を開催するなか、1973年から翌年にかけて、パリのルーブル美術館で《モナリザ》を模写をすることになる。これは彼自身相当の自信になったようでもあり、その後充実した作品が生み出されるようになる。

70年代の「赤絵」は、屋根や着物に青を使うのみで、あとはほとんど赤、しかも輪郭線の脇にハイライトが施され、眼にまぶしいばかりである。画題の多くは自身の曾祖母など老人であり、屋根の上での七五三の祝いや、嫁との記念撮影を描いたりする。屋根の上には汽車も登場し、老婆を石庭に坐らせたり箪笥の上に坐らせたりと、自由な発想である。登場する人物の圧倒的な存在感は極めて印象的である。描かれる老人の姿には、重ねてきた齢に対する素直な敬意と愛情が確かに感じられ、奇妙で鮮烈な色彩の向こう側に、人間に対する深い愛情を見ることができるであろう。

他に例のないこうした作品により、1974年第18回シェル美術展で２等を獲得、1975年には独立展で《屋根の上の七五三》が独立賞と海老原賞を受賞、1982年第50回独立展では50周年記念賞を受けている。また1977年国際ナイーブ美術展(ユーゴスラビア)に出品して以来海外でも個展を重ねてきている。

80年代になると、《並ぶ人々》、《登る人々》など、群衆や、数知れない看板をイラスト的に描き込む作品が目立つようになり、この傾向は現在まで続いている。1988年には愛知県芸術選奨文化賞を受賞。(hhk)

斎藤吾朗《石庭のおばあさん》1977年　名古屋市美術館蔵

展評

2009年6月9日(火)〜27日(土)
ガレリアフィナルテ

「岡崎乾二郎展」

この作家の作品を見るたびに「なんと美しいのだろう」と思わずにはいられません。しかし、こんな感想は恐らく作家の喜ぶところではないでしょう。視覚という末端感覚だけを楽しませるような絵は嫌いである、と公言してはばからず、思索をめぐらす書物のような絵画を制作したいと望む作家にとって「美しい」などという陳腐な表現は、なんの褒め言葉にもならないかも知れません。しかし、透明感のあるアクリル絵の具を塗り重ねたキャンヴァスの前に立つとき、わき上がってくる静かな喜びを表現するなら、やはり「美しい」という言葉以外には見つかりません。白いキャンヴァスの上に置かれた、様々な色を持つ不定形の絵の具の集合が、なにゆえにこれ程までの喜びを与えてくれるのか、それを説明するのは簡単ではありません。というよりも、そもそも無理な注文でしょう。絵画の秘密は、けっきょく絵画の中にしかそれを解く鍵はなく、この喜びを体験したければ、岡崎乾二郎の作品を見て下さいという以外にありません。その無理を承知で敢えて言葉を探すとするならば、自由と抑制が、感性と知性が、作品の中で見事な均衡を保っていることが、美しさと喜びの鍵といえるかも知れません。周知のように、一見奔放に思える岡崎の作品は、実は綿密に計算されたフォルムと色彩の組み合わせの上に成立しています。画面をしばらく眺めていると、全く同じ形を持った絵の具のタッチが、色を変えたり、向きを変えたりして繰り返し現れることに気づきますが、版やマスキングを使って整えられたそれらの形には、単調さや窮屈な感じは全くありません。気ままで自由で、繰り返すことが難しいはずの絵の具のタッチを、緻密な計算の上に再現し、画面の構成要素としてしまう。この感性と知性のせめぎ合いの上に岡崎乾二郎の複雑にして豊かな絵画世界は広がっています。その絵画世界を読み解くことは、まさに作者が望むとおり、書物をひもとくことに等しい喜びを私たちに与えてくれるのです。(F)

CULTURE, MOVIE, DRAMA, MUSIC & BOOK

メイプルソープとコレクター

原題：Black White+Gray A Portrait of Sam Wagstaff+Robert Mapplethorpe
監督：ジェームズ・クランプ
2007年アメリカ・スイス合作映画

写真家のロバート・メイプルソープ(1946ー1989)が亡くなって20年。彼の死の前後には、ホイットニー美術館での回顧展やスキャンダルとなった全米巡回の回顧展などがあり、日々話題に事欠かなかった記憶がある。名古屋市美術館も没後4年目の1993年に特別展として「ロバート・メイプルソープ展」(2月13日ー4月4日)を催し、業績をいち早く紹介したけれども、一時のあの熱気はどこに行ってしまったのだろうと今改めて思う。

ここで紹介する『メイプルソープとコレクター』の広報には「メイプルソープ没後20周年」と添えられていた。そんなになるんだと、長らく思い出しもしなかったことを思い返すきっかけをもらったが、これはメイプルソープを売り出し、成功へと導いたサムエル・ワグスタッフ(1921ー1987)に光を当てたもの。原題の「Black White+Gray」は、ワグスタッフが1964年に企画した展覧会のタイトルから取られている。

ワグスタッフは独自の審美観と行動力で優れた個人コレクションを作り、キュレーター(展覧会企画者)としてアメリカの美術の動向に影響を与えた。写真に芸術としての価値を認め、コレクションとキュレーションを通して実証した。写真が芸術でありうることを疑う人は今の美術関係者にはいないと思われるが、こうした共通認識を生む動力のひとつがワグスタッフだった。

監督のクランプは写真キュレーターの経歴があり、メイプルソープの写真集などを出版している。『メイプルソープとコレクター』は映画監督としての第1作目。メイプルソープとその作品、美術館に収蔵されたワグスタッフのコレクションは後の世代に引き継がれていくが、ワグスタッフは忘れ去られてしまうと危惧したという。明と暗、そしてたやすく白黒をつけられない灰色の部分を含めてワグスタッフに寄り添い、彼を記録しようとしたクランプの姿勢が暖かい印象をもたらす。メイプルソープとワグスタッフのふたりと親密に交わったパティ・スミスがワグスタッフを語る姿は愛情と思いやりに満ちていて、ひとりの人としてのワグスタッフを親しく身に感じさせる。

彼らが生き軋轢した時代と社会は気持ちのうえで遠くなったけれど、本当に遠いものになったのかと思わされた記録映画である。(み。)

©JCPLLC and LM Media GmbH, 2007. All rights reserved.

イベントガイド

■特別展 躍動する魂のきらめき
ー日本の表現主義ー

西欧の「表現主義」の刺激を受けながらも、個人の内面世界から、また、日本の美意識の深層から立ち現れた造形活動とその成果を、美術はもとより、建築、映画・写真、デザイン・工芸など様々なジャンルにわたって紹介します。混沌、熱情、躍動を見せながら、現実に対して、或いは社会に対して若き芸術家たちが提示しようとした熱き"時代精神"の軌跡をたどります。

会　期：8月25日(火)〜10月12日(月・祝)
会　場：第1・2企画展示室
入場料：一般1,000円、高大生700円、小中生400円

【関連催事】

○記念講演会

・「『生命』の表現ー20世紀の芸術思潮を考える」
9月6日(日)14時〜　講堂　先着180名　無料
講　師：鈴木貞美 氏(国際日本文化研究センター教授)

・「芸術の革新から人間の解放と社会の変革へー世界的同時性としての表現主義ー」
10月4日(日)14時〜　講堂　先着180名　無料
講　師：池田浩士 氏(京都精華大学客員教授)

○作品解説会

9月13日(日)14時〜　講堂　先着180名　無料
講　師：竹葉　丈(当館学芸員)

○映画上映会

・「ドイツ表現主義映画月間ー『カリガリ博士』から『メトロポリス』まで」
"Expressionist Film in September"
9月4日(金)、11日(金)、25日(金)18時〜　9月5日(土)14時〜　9月20日(日)〜22日(火・休)1回目10時30分〜、2回目14時〜
講堂　先着180名　無料
上映作品：①『カリガリ博士』(1919年、75分、16m/m、無声・白黒)監督：ロベルト・ウィーネ　②『吸血鬼ノスフェラトゥ』(1922年、93分、16m/m、無声・白黒)監督：ロベルト・ウィーネ　③『ジークフリート』(1924年、143分、16m/m、無声・白黒)　④『ドクトル・マブゼ・犯罪地獄』(1922年、139分、16m/m、無声・白黒)　⑤『死滅の谷』(1921年、119分、16m/m、無声・白黒)　⑥『裏街の怪老窟』(1926年、85分、16m/m、無声・白黒)監督：パウル・レニ　⑦『メトロポリス』(1926年、85分、16m/m、無声・白黒)
※いずれも無声映画、字幕あり。

・「無声映画と音楽の出会い」
無声映画にピアノ伴奏で見せるサイレント映画上映会を開催・演奏してきた柳下美恵氏のピアノとトークを交えた上映会。
9月18日(金)18時〜、19日(土)14時〜
出　演：柳下美恵 氏(無声映画伴奏者)
演　目：『カリガリ博士』、『死滅の谷』
講堂　先着150名　無料

○ボランティアによるギャラリートーク

9月8日(火)、10日(木)、15日(火)、16日(水)、17日(木)、23日(水・祝)、25日(金)、26日(土)、10月1日(木)　10時30分〜／13時30分〜

■特別展 あいちトリエンナーレ2010プレイベント
放課後のはらっぱ
ー櫃田伸也とその教え子たちー

櫃田伸也と教え子たち(奈良美智、杉戸洋、森北伸を始めとする現代作家)の作品を展示し、この地方の現代美術シーンの一端を紹介します。愛知県美術館との同時開催の企画です。

会　期：8月22日(土)〜10月18日(日)
会　場：第3常設展示室
入場料：無料(愛知県美術館[愛知芸術文化センター10階]：8月28日(金)〜10月25日(日)、
入場料：一般800円)

【関連催事】

○はらっぱ一日カフェ

10月18日(日)9時30分〜17時
場所：カフェ・ステラ
特別レシピ：加藤美佳 氏、安藤正子 氏
出品作家のレシピによる、どこか懐かしい味を堪能しながら、カフェで作家と話ができます。

○はらっぱフォトバッジ、バッチ・グー！

10月18日(日)1回目10時〜12時、2回目14時〜16時
場　所：地下キッズコーナー
各回先着100名　無料
講　師：櫃田珠実 氏(作家)
出品作家と一緒に展覧会の出品作品の缶バッジを作ります。

○幻灯会

10月18日(日)14時〜、16時〜(各回15分程度)
場　所：名古屋市美術館　講堂
幻　燈：設楽知昭 氏(作家)
出品作家による摩訶不思議な幻灯会。透明壁画が壁に浮かび上がります。

■特別展 絵画と写真の交差
ー印象派誕生の軌跡

「絵画」と「写真」が出会うことによって、一体何が起こったのか？「絵画」と「写真」という二つの芸術の歩みを辿りながら、それらがどのように係わり合ってそれぞれの芸術を深化させてきたか、また、写真が印象派の画家たちにどのような影響を与えたのかを検証・紹介します。

会　期：10月24日(土)〜12月20日(日)
会　場：第1・2企画展示室、
第3常設展示室
入場料：一般1,200円、高大生800円、小中生500円

【関連催事】

○記念講演会

・「写真から絵画か？ 絵画から写真か？
ー 印象派をめぐる視覚メディアの交錯 ー」
10月25日(日)14時〜　講堂　先着180名　無料
講　師：三浦　篤 氏(東京大学教授)

・「印象派　視覚の革命ー写真との蜜月時代」
11月28日(土)14時〜　講堂　先着180名　無料
講　師：五木田　聡 氏(東京富士美術館副館長)

○作品解説会

11月15日(日)14時〜　講堂　先着180名　無料
講　師：原沢暁子(当館学芸員)

■コレクション解析学2009ー2010

学芸員が当館のコレクションから特定の作品をとりあげ、その魅力などを紹介する講座です。14時〜　講堂　先着180名　無料

○第3回　9月27日(日)
作品：鬼頭鍋三郎《手をかざす女》1913年
演題：立ち止まる私ー彼女は何をする女(ひと)ぞ
講師：角田美奈子(当館学芸員)

○第4回　11月29日(日)
作品：福田美蘭《陶器(スルバランによる)》1992年
演題：絵画(イリュージョン)であることの証明
講師：清家三智(当館学芸員)

■名古屋市美術館「キッズの日」

○なりきりアーティスト

よく見て「つくって」考えて楽しむプログラムです。
対　象：小学生
参加費：1名300円
定　員：各回30名
日　時：10月24日(土)　10時〜12時
申込締切：9月30日(水)

○アート・ウォッチング

美術館にある絵や彫刻を「よく見て」楽しむプログラムです。
対　象：小中学生と保護者(高校生以上)
参加費：1名50円(ただし、保護者は別途常設展観覧料が必要です。)
定　員：各回10組
日　時：11月29日(日)　10時〜12時
申込締切：10月31日(土)

※申込方法など詳しくは当館ホームページ(http://www.art-museum.city.nagoya.jp/)をご覧ください。(T・Y)

協力会通信

知られざるダニ・カラヴァンの庭園
ー室生山上公園芸術の森

今年の協力会の春のツアーは、新型インフルエンザの流行が懸念されているなか催行されました。

今回は初めての美術館、博物館以外の訪問地ということで、奈良県の室生村(現在の宇陀市)が過疎対策の事業として実施した「むろうアートアルカディア計画」の中心施設である「室生山上公園芸術の森」と「女人高野」で知られる室生寺を訪ねました。

美術館を出発する頃は小雨模様でしたが、現地に到着すると、予想外の好天に恵まれ、「紫外線が強くて」とおっしゃる会員の方も見えるくらいでした。

室生寺と言えば、10年ほど前に台風で倒れた大木により損傷を被って心配された国宝の五重塔も、現在では修復されて、静かな杉林のなかに可憐な姿を見せていました。

しかし、今回の目玉は何と言っても、現代美術ファンの間でも意外に知られていない「室生山上公園芸術の森」です。イスラエル出身の世界的な彫刻家で、環境芸術の先駆者であるダニ・カラヴァン(1930ー　)は、日本でも、札幌彫刻の森野外美術館や霧島アートの森などで作品を制作していますが、親友であった室生出身の彫刻家・井上武吉(1930ー1997)の没後、初めて室生を訪れて、故人が抱いていた「森の回廊計画」を知るとともに、室生の自然と文化に魅せられて、この「室生山上公園芸術の森」を7年の歳月(1999〜2006年)を掛けて制作したのです。

山深い室生の澄んだ空気と眩しい陽光を浴びながら散策していると、水の流れや鳥の鳴声が微かに聴こえてきます。人類の歴史と文化を感じさせる独特の造形物は、自然と見事に調和しながら、不思議な場所を構築して、私たちの心のなかに眠っていた大切な物語を思い起こさせてくれます。会員のなかからは「もっと長く居たかった」という声も聞かれました。(sy)

室生山上公園芸術の森で(2009年5月30日)

【編集後記】
今年の梅雨はいつもにも増して雨が多く、このアートペーパーの編集作業中の現在、もはや7月も後半というのに未だ梅雨が明けません。例年のように猛暑というほど気温が高くないとはいえ、じめじめとした天気は決して快適ではないのですが、このうっとうしい天気に、気分負けしていられません。美術館では、様々なイベントが目白押しです。本年度は、夏休みこどもの美術館を例年より拡大して開催していますし、8月末には『躍動する魂のきらめきー日本の表現主義』展や「放課後のはらっぱー櫃田伸也とその教え子たち」展がはじまります。イベントガイドコーナーも映画会や講演会などの関連催事が満載ですが、「文化の秋」を目の前にみな準備で大忙しです。秋にはじまるこの2つの展覧会は、一つは大正期にこの日本という地で展開した芸術について、もう一つは名古屋から発信していった作家達の作品を紹介するものです。今後も市民のみなさまに愛され、また、名古屋から全国、あるいは世界へと発信できるような美術館目指して引き続き頑張っていきたいと思います。(hina)

アートペーパー第81号 発行日：2009年8月1日
発行 名古屋市美術館[白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄《伏見駅・大須観音駅》下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日:毎週月曜(祝日の場合は直後の平日)
Nagoya City Art Museum

古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

執筆者／神谷浩(hhk)、深谷克典(F)、山田諭(sy)、山盛孝久(T.Y)、竹葉丈(J.T.)、角田美奈子(み。)、原沢暁子(akko)、笠木日南子(hina)、清家三智(3)、保崎裕徳(nori)